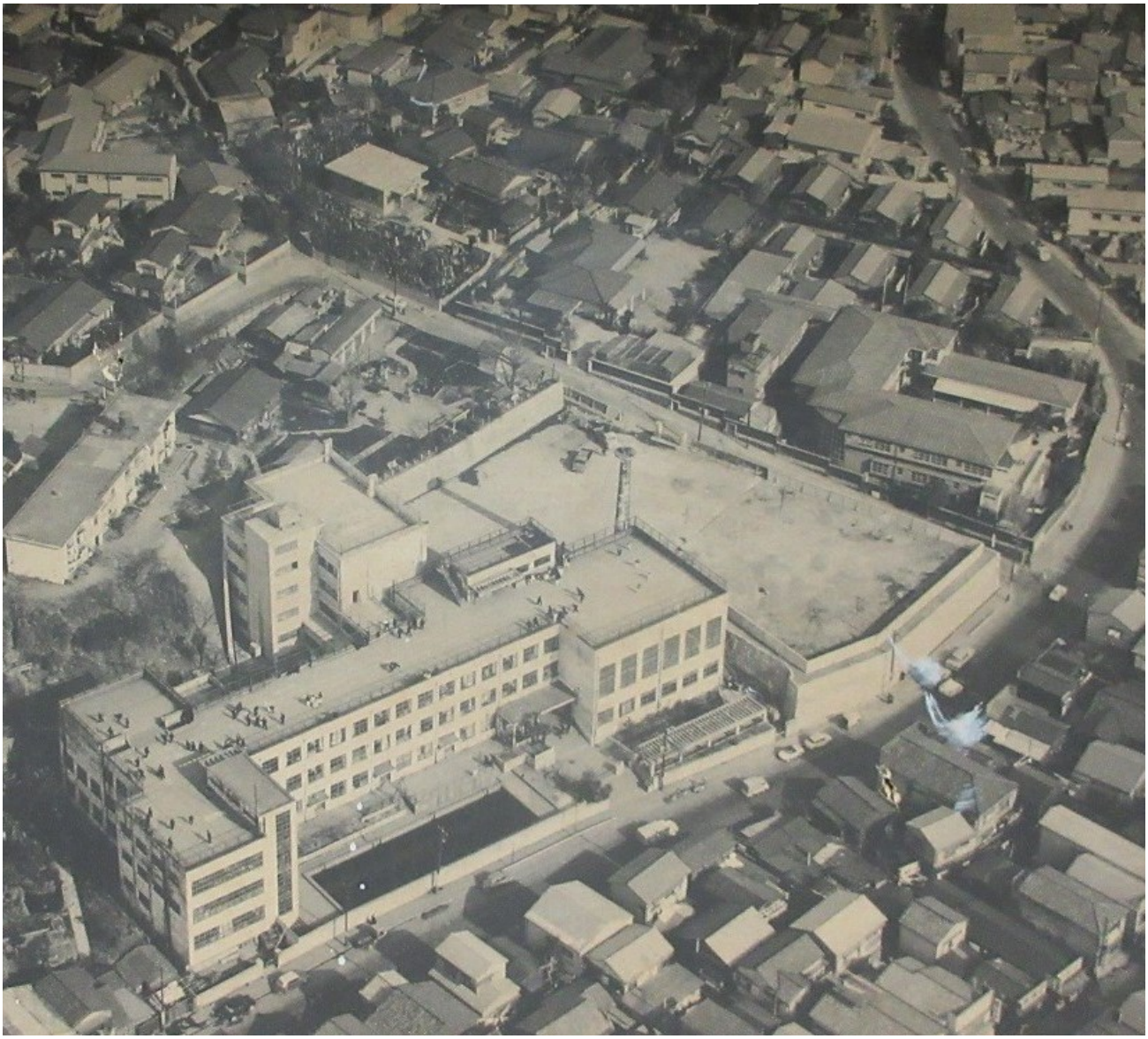
文京区の人と地域をつなぐ情報誌

第一号

文京人



1962年撮影　文京区立第五中学校

文京区の人と地域をつなぐ情報誌

絆社会の実現に向けて

『文京人』と〝共に生きる〟

山内哲也
社会福祉法人武蔵野会
リアン文京 総合施設長

『文京人』創刊

『文京人』創刊号をみなさまにお届けします。『文京人』はリアン文京で開催された「セカンドステージ・サポート・ナビ」（生きがい探しガイドブック）の編集者養成講座に参加された受講生のみなさんが、愛する文京区のために何かできないかと発心して誕生しました。

編集に携わったメンバーは講座修了の第一期生の方たちです。1年間かけて学んで習得した写真撮影、インタビュー、デザインほか各種の編集スキルを活かし、地域を応援する地域情報雑誌を自らの手で発行します。

「セカンドステージ・サポート・ナビ」とは、これまで様々な経験を重ねて人生を築き、新たなる「セカンドステージ」へ歩み出そうとしている50代以上の方に文京区が行っている最新の行事等の情報提供を行うことで、ミドル・シニアから元気高齢者のみなさまの社会参加を推進することを目的に文京区が毎年発行してきた冊子です。

平成30年から文京区の「ミドル・シニア目線を活かした発信力強化事業」を武蔵野会が受託し、ミドル・シニアの方に参加してもらい、それまで文京区が発行していた「セカンドステージ・サポート・ナビ」の、自分たちの目線から自分たちが使いやすい冊子を目指して編集・制作を始めました。現在では「セカンドステージ・サポート・ナビ」のウェブサイトも運営されています。

「文京人」の物語に触れる

わが街文京区は大学などの集まる「文の京」、文豪ゆかりの場所が多い「文豪のまち」神社仏閣や江戸情緒を残す「歴史のまち」と様々な顔を持ちますが、一番の魅力はそこに住み暮らす「文京人」たちです。

そこで、本誌はセカンドキャリアとして夢や希望、信念を持って活躍する「文京人」の活動や生きざまにスポットを当てます。一人ひとりの生活には何ものにも代えがたい物語があります。その人が歩んできた人生の物語を垣間見たとき、私たちはきっと共感し勇気づけられるでしょう。わが街の物語をご紹介し、読者のお一人お一人が元気づけられ、「文京人」が読者のみなさんの新しい活動のはじまりとなることを願ってやみません。

社会福祉法人武蔵野会は、今日の地域社会を「孤立の社会」と考えています。少子高齢化による人口減少は留まることを知らず、社会構造も大きく変容しています。この地域社会の中で、様々な世代、家族、労働者、学生、障害や病のある人などが何らかの生きづらさや疎外感を持ち、孤立しています。今こそ文京区に住み暮らす・働く「文京人」たちが共に生きる地域社会を築けたらと願っています。本誌が少しでも共に生きるまちづくりの一助になったら幸いです。

文京総合福祉センター

文京人インタビュー

NPO法人小石川後楽園庭園保存会　高橋豊さんに聴く

未来をつくる第一歩は、関わり、触れていくことから

――会に関わるようになったきっかけや印象に残っている活動は何ですか？

私はもともと商社マンでした。48歳のときに早期退職し、通信教育で学芸員資格を取りました。日本美術史が専門ですが、資格を取得するときに出会った方々が、本当に素敵な方ばかりでした。

その中の一人が、本会の理事でした。その方から「代々文京区に住んでいるのに、なんで貢献しないの？」みたいなことを言われて。逃げきれなくなって入会したということです（笑）。本会は、もともと庭園環境を守るため高層ビルなどとの交渉を行うための団体だったようです。

活動の中でも、新大塚公園の取り潰し反対運動は印象に残っています。「桜があんなにきれいで、ゲートボールや少年野球が盛んにされている区民の憩いの場じゃないですか」と区民の目線でやってほしいと訴えました。

都心の真ん中にあって、緑豊かな小石川後楽園・小廬山

髙橋豊さん（NPO法人小石川後楽園庭園保存会 理事）

1950年東京生まれ。慶應大学法学部政治学科卒業後、三井物産に勤務し、48歳で早期退職。宇都宮大学大学院国際学研究科修了、杏林大学大学院国際協力研究科博士後期課程単位取得退学、博士（学術）。主な著書に『日本の近代化を支えた文化外交の軌跡―脱亜入欧からクール・ジャパンまで』福村出版など

――小石川後楽園と近隣ビルの会社や団体との関わりについて教えてください。

高さを少し下げていただいたり、庭園から離れたところに通路をつくるなど、一定の距離をとっていただきました。小石川後楽園についての説明の掲示設置。隣の日中友好会館の方も非常に関心を持ってくださり、「江戸情緒を守る」という意味でも応援してくれています。

――NPO法人となって15年が経ちました。現在の会員数やPR活動について教えてください。

現在の会員数は90名くらい。私たちは単なる庭園ボランティアガイドではありません。小石川後楽園は、庭園の中を神田上水が流れ、最終的に日本橋の方に流れていたわけです。風景だけでなく文京区の歴史、小石川後楽園の位置付けが分かると面白いんです。小石川後楽園が江戸の歴史を脈々と引き継いでいるということを知ってもらいたいと思っています。

きれいな水、緑に囲まれた円月橋

――今後、取り組んでみたい活動はありますか？

文京区の小学生には、年に一度は小石川後楽園に来る機会をつくってほしい。文京区はある意味成熟しているのですが、「文京区と共に生きる」、そんな郷土愛的な感覚が大切だと思っています。

東京都と文京区との間でうまく調整をとるというのが民間団体にできる仕事なのかなとも思っています。

――参加されているのはどんな方たちですか。

庭に詳しい人ですね。歴史好きな人もいますよ。

全国に残っている江戸時代の大名庭園のうち福島から熊本まで、加盟10団体。「大名庭園を世界遺産に」という目標を掲げてシンポジウムを年1回開催（主催は大名庭園民間交流協議会）しています。

皆さんすごく地元を愛していて、熱意を感じるんですよね。そういったところに刺激を受けます。

――これからの会員に期待することは

参加者は仕事を辞めてからという人が多いようです。

一度、親子で参加すると変わりますよ。未来に向けて、知識がなくてもいいから触れていくことは大切です。帰りに後楽園遊園地へ行くのとセットになるといいかもしれません。

急にオフの生活になると、ギャップが大きくて、おろおろしている人がたくさんいますね。会社の中での存在価値も大事だけど、地域社会での自分の価値観が必要ですね。会社だけじゃなしにちょっと寄り道をしてみることをお勧めします。

髙橋豊さん（左から2人目）と『文京人』編集部

■表紙の写真

現在文京総合福祉センターが建っているところには、黒田小学校（１８７８年創立）、文京区立第五中学校（１９４７年創立）が建っていました。表紙の写真は、１９６２年の文京区立第五中学校の様子です。

■写真提供：（表紙）文京区立音羽中学校

（本文）ＮＰＯ法人小石川後楽園庭園保存会

■題字作者：上村正子

■誌名『文京人』に込めた想い

「文京人」と聞いてどのような人を皆さんは思い浮かべますか。文京区にお住まいの方、仕事で通勤をしている方、文京区で活躍されている方・・・いろんな人が当てはまるのではないでしょうか。

私ども編集部はそういった文京区に関わり、「文京区を愛する人」さらにはこれから「文京区を愛してくれる」方々に向けた情報誌で文京区の人と地域をつなげたい、そのような思いを込めて、『文京人』という誌名を付けました。

――編集後記

文京区に住むミドルシニアの力でミドルシニア向け情報誌を作成しました。

文京区にお住まいの方や関係の深いミドルシニアの魅力的な生き方を主として取り上げる編集方針で進めました。担当者は過去に編集と云うものに携わったことのない者がほとんどでしたが、伝わるデザイン、伝わる編集、伝わる写真とは何かを学びながらそしてインタビュー体験、人物写真の撮り方を実習し、時間が掛かりましたがやっと辿りついたのがこの創刊号です。そのため稚拙な点はご容赦ください。

今後、地域情報誌として、よりよく面白く発展していけるよう努力してまいります。

文京区の人と地域をつなぐ情報誌『文京人（ぶんきょうじん）』第一号
企画編集
『文京人』編集部（木下佳子／武田知久／福原正憲）
発行：社会福祉法人武蔵野会 リアン文京
発行日：２０２０年12月１日

お問い合わせ先　社会福祉法人武蔵野会
文京福祉センター江戸川橋
電話：０３－５９４０－２９０１

無断転載禁止